



左—「グッド・トゥ・トーク」にて、アーティストのヘルガ・レットマンがアーティストのアグニエシュカ・ポルスカをマッサージュしながらインタビューをするパフォーマンス © Eike Walkenhorst Courtesy of Good to talk
右—「グッド・トゥ・トーク」でのトークの様子 © Eike Walkenhorst Courtesy of Good to talk



「アート・ベルリン」に参加したベルリンのギャラリー、ミハエル・ヤンセンのブースでは、ベルリンを拠点に活躍する手塚愛子（中央奥）も並び、人気を集めた
Courtesy of Galerie Michael Janssen, Berlin

ベルリン・アート・ウィーク 新たなマーケットが産み落としたもの

毎年恒例となった「ベルリン・アート・ウィーク」は、今年で6回目を迎えた。数多の展覧会オープニング、イベントにパーティー。この週間のベルリンの街には、地元のアート・シーブルのみならず、海外からも関係者が絡み出て集まった。そのメインイベントとなるのがアートフェアだ。昨年の極端な規模の縮小に存続が危ぶまれたabc (art berlin contemporary) は、ケルンのフェア「アート・ケルン」とのコラボレーションによって「アート・ベルリン」に生まれ変わった。旧郵便物の仕分け場である会場は変わらず、16ヶ国から、112のギャラリーが参加。4日間でおよそ3万3000人の来場者があった。これまでよりも狭いブースが立ち並び、以前のように壁のないブースにダイナミックなインスタレーションが次々と待ち構えるようなインパクトは消え、古典的な形式に完全な逆戻りをした印象は拭え

ないが、「売れる」フェアへの新たな舵取りととらえるべきであり、これこそが望まれた状況だ。実際に、各国の良質なコンタクトが多く取れたこと、売り上げも順調だったことを告げるギャラリストが多かった。こうした主に作品の販売のためのプレゼンテーションを目的にしたアートフェアに対し、「ベルリン・アート・ウィーク」が始まる直前の週末、公式プログラムではないが、キックオフイベントとして今年初めて行われたのが、「グッド・トゥ・トーク (Good to talk)」。この46時間ノンストップのノン・コマース的なトークイベントをオーガナイズしたのが、ベルリンの20のコマース・ギャラリーのオーナーたちだ。各ギャラリーのアシスタントたちが駆り出されて会場設営する、手づくりの企画だ。会場となったのは、世界最高峰と言われるクラブ、「ベルクハイ

「アート・ベルリン」
Art Berlin
9月14日～17日
ステーション・ベルリン
STATION – BERLIN
* Luckenwalder
Straße 4-6, Berlin
Tel. +49-30-700-38-771

「グッド・トゥ・トーク：46時間の会話」
Good to talk —
46 hour in conversation
9月8日～10日
ベルクハイン・カンティーン
Berghain Kantine
* Am Wriezener
Bahnhof, Berlin



左—「アート・ベルリン」のシュブルート・マガースのブースにて、ヨーン・ボックのソロ・インスタレーション「Labskaus oder der alte Scharoun in seinem Elend」(2016) Photo by Timo Ohler © John Bock Courtesy of Sprüth Magers
右—「グッド・トゥ・トーク」客席の様子 © Eike Walkenhorst Courtesy of Good to talk



左—ヴォルフガング・ティルマンスのチームがデザインをした7種類のポスターのうちのひとつ。[花は美しい。選挙へ行くこともまた同じ]。ポスターは全国1万ヶ所に送付され、ウェブサイトからのダウンロードも可能
右—「新しい写真、ベア・ファイトラーの仕事」展の展示風景 Photo by Between Bridges, 2017

ン」に併設されるバー「ベルクハイン・カンティーン」。アート・セオリーから社会問題まで幅広いトピックで、時にはギャラリー・オーナーたちも登壇し、観客との距離感も近いオープンなトークが繰り広げられた。アート周辺の新たなシステムの構築に意欲的なこの20のギャラリーが、今後のベルリンのアート・シーンを担う。

「アート・ウィーク」の週末には、ベルリンの中心街で大規模なデモも展開した。難民問題、女性の権利や教育を受ける権利などを叫ぶあらゆる声が、音楽やラップに乗って響きわたった。ベルリンにはアートがあり、声を上げる者たちがいる。そのひとりであるヴォルフガング・ティルマンスが運営するプロジェクト・スペース、ピトウイン・ブリッジズでは、ブラジルのデザイナーであり、アート・ディレクターであったベア・ファイトラー(1938-

1982)の個展が開催されている。アメリカのファッション雑誌「ハーバース・バザー」や、創設にも関わったフェミニスト雑誌「Ms.」での鮮やかで鋭い視点を持つ仕事や資料が展示され、ファイトラーの新しいイメージを探る掘り起こしの企画となっている。

またティルマンスは、EU離脱に反対するキャンペーンに続き、9月24日のドイツ総選挙へ投票に行くことを促すポスターの制作・配布も行った。さらにティルマンスの公式ウェブサイトには、極右政党である「ドイツのための選択派 (AfD)」が肥大する危険性を訴えていた。しかし選挙の結果は、AfDが初めて議席を獲得して第3党となった。このような不安定な社会状況のなか、「アートがこれまで以上に社会に必要な存在になっている」という意識が、ヨーロッパの関係者の間では高まっている。

Berlin ベルリン

かないみき=文
Text by Miki Kanai
(Art Journalist)

「新しい写真、
ベア・ファイトラーの仕事」展
New Picture, The Work of
Bea Feitler
9月13日～11月4日
ピトウイン・ブリッジズ
Between Bridges
* Keithstrasse 15, Berlin
12:00～18:00
日～火休